

本当の東京の話をしよう

もゆ

「あんなバカア?」、電話の向こう側、女は叫んだ。本放送からもう十年に近い歳月が流れたというのに、無理もない、性根は隠せないものだ。

「あたしとのデート蹴って、ジャスコに行くですって? 莫迦も休み休み言いなさい」

私は大仰にためいきをついた。「きみがジャスコのなにを知っているっていうんだ?」

「『下妻物語』で観た。……あんだといっしょに観たんじゃないか」女の声はどこか不安げに、半分にちよん切られた疑問符を含んでいた。

「渋谷のシネクイントでね。行ったことはないだろ?」

「あるわけないじゃない。こちとら麻布十番温泉を産湯に使い、自由が丘のお屋敷に住まう深窓のお嬢さまだぜ」

「それでも、性根は隠せないものだね」

「そうよ。つて、え、なんのこと?」

「なんでもない。そう、ぼくもないんだ、ジャスコに行ったことが」

「いいじゃない、行ったことなんかなくたって。それより、あたしと恵比寿ガーデンシネマで映画を観よう」

「『モーターサイクルダイアリーズ』か」

「そうそれ。ゲバラ好きでしょ」

「ゲバラは好きだが、」初めて女の口に告白するひっこみ思案な男のこみたにおずおずと私は告げた。「実はもう新幹線の車内にいるんだ」

「え、新幹線? 新幹線で行くの?」

「ああ。止めてくれるな、おつかさん、背中 of 牡丹が泣いている、つてね」

「止めないけどね、あたし、あんだのお母さんじゃないし。でも、新幹線つて、莫迦じゃない」

「莫迦でけっこう。ところで、土産はうなぎパ

イでいいかい？」

「え、浜松のジャスコなの？ ……真夜中のだつたら許してあげる」

発車のブザーが鳴った。

イヤホンを耳からはずすつ、Tokyo No.1 Soul Set が鳴りやんだ。横浜に住んでいた高校生の私が、それをこそ東京だと信じていた音楽だった。なんてもちろん、与太に決まっていた。東京に幻想を抱くには、横浜は東京に（そのころの私にとっては渋谷に）近すぎた。

車のドアを開き、私は助手席にすべりこんだ。

「どうですか、浜松の第一印象は？」

運転席の男が訊ねた。浜松に日本最大の、畢竟世界最大のジャスコがあると誘った男だった。

「うむ、ううむ、」

まとまらない思考に私は喘ぎに似た溜息をもらした。

「さびれている、と、思いませんでしたか。小さい街ですから」

「しかし、地方都市なんて、どこもこのようなものだろう」

「ええ、そのとおり。どこもかしこも、そう、東京とその郊外を除けば」

「駅ビルの本屋に行つたんだ」

「ああ、どうでした？」

「文芸書が多かったな。技術書も多かった」

「浜松でもっとも文化的な本屋ですからね。技術書は、理系が多いからですよ。ほら、発動機屋で有名でしょう」

「なるほど。後は、結婚雑誌が少なかったな。」

育児雑誌は多かつたのに」

あるいは、ゼクシイやらなにやら、棚ひとつ丸々いっぱい占領している渋谷のブックファーストが異常なのかもしれない。けれども、どちらが異常さを抱えているにしても、差異はやは

り存在するのだ。

「まあ、判りやすい説明はつけられますけどね」

「ああ」

世界は嫌になるくらいの判りやすさであふれている。そんなことは判っていた。判っていて、私は眼をそらしてきた。けれども、判りやすさは圧倒的な物量で眼前に迫りつつあった。

「見てください、遠くに見えるあの巨大な建造物、あれがジャスコです」

ジャスコが視界に入っても、たどろつくためには長い長い時間がかかった。制限時速二十キロオーヴァーで、私たちは街道を飛ばした。

街道が渋滞していた。新しく開店したユニクロの駐車場が満杯で、道にまで長い長い列を作っていた。

啞然とした私をちらりと見て、運転席の男が囁いた。

「驚くにはまだ早いですよ」

口を開いたまま、頸を回し、彼を見た。

「さて、そろそろ到着です」

「おお」

「しかし、ここからが本番ですよ」

「え？」

彼は眼で道に立つ男を示した。男はプラカードをかがげていた。「駐車場満杯です。ただいま、

一時間待ち」

「ちよ、ちよ、ちよつと待て」

「なんです？」

「あの巨大な建物は、ほとんどが駐車場なんだよな？」

「ええ、三五〇〇台停められるらしいです」

「そ、そ、それが満杯なのか？」

「みたいですね」

「三五〇〇台って、一万人近く客が来てるってことだよな」

「ちなみに浜松市の人口は六〇万です」

今度こそ、本当に開いた口がふさがらなかつた。アメリカから直輸入したはずのモーターゼーションが、この国に着地してどのように花開いたのか、私は初めて感覚しつづあつた。自動車産業の末端で働いていてさえ、私はそのことを判つてはいなかつた。

「一時間もはまたなくてもいいようですね。さあ、そろそろですよ」

ジャスコ、正しくはイオン、つまりショッピングモールと低価格帯のスーパーマーケットである狭義のジャスコの複合体は、サイエンスフィクションのなかでも行儀の悪いものとされる部類の小説に良く出てきた環境建築のように見えた。住居を機能のなかに備えていないことを除けば、まったく自己充足的に見えた。

窓がなく、内部は蛍光灯の灯で煌々と照らさ

れ、一時間もなかにいれば外部など存在しないと本気で信じられるようになりそうだった。

「外部などありませんよ」

「うん、きつとそうなんだろうな」

「ぼくたちが外部があると考えているのは、ぼくたちが外部から来たからです」

「ああ」

「今、来ている服、どこのですか」

「コムサのモード」

「ここにあるコムサはイズムだけです。値段が一桁違う。判りますか？ ここには外部なんてないんです」

「もしかしたら、これは人工衛星みたいなものなのかもしれないな。ひとびとは皆、駐車場にRV車を停めてそこで寝泊まりしている」

「そんなの当たり前ですよ。それとも、こう言いますようか？ Welcome to the desert of the……」

彼の言葉、その最後の単語までは聴き取れなかった。

もしかしたら、それは「real」ではないものと重要な単語だったのかもしれない。

「大きなつづらと小さなつづら、どっちがいい？」

「ええと、ええと、」女は真剣に悩みはじめた。

私は女のジーンズに掌をかけ、ホックをはずし、ジッパーをさげた。

「もう、えっち」

「つかぬことを訊くが、」

「ん？」

「このジーンズ、どこで買った？」

「……GAP」

私の掌が動きをなくし、やがて空気までが凍つとき、空調の音だけが狭い部屋に響いた。

「な、な、なによ、その沈黙。どどどどうせ、」

下は無印のショーツだし、キャミはユニクロのパット入りだけど。ええ、ええ、2ちゃんで彼氏できない下着って呼ばれてるアレですよ。なによ、あたしが色気のない下着はいてて、あなたになんか迷惑かけた？ いいでしょ、楽なんだから。ほつといてっ」

「そんなきみには、大きなつづらを是非お薦めするね」

「これってなかなかに入ってるの？ 大ききの割に軽いんだけど、服？」

「尼崎直輸入ジャージだ。あいた、いたいいたいたい」

女は小さいつづらで私の頭をしこたま殴った。箱の角が痛かった。

「じゃあ、こっちは？」

「ご希望どおり、うなぎパイVSTOPだ」

「きゃあ、パイが崩れちゃうじゃない」女の掌がようやく止まった。「……ねえ、着てみてあげ

ようか？」

「ん？」

「ジャージ。せっかく買ってきたんだしさ」女は包みをびりびりと引き裂きながら告げた。「じやーん、生着替えシヨ」

私がうなずくよりも早く、なぜか上機嫌な女は鼻唄を歌いながら、ずり落ちかけたジーンズから練馬大根みたいに健康的な脚を引き抜いた。ジャージの上下を身につけ、なにかを挑発するように腰をくねらせて踊った。彼女の眼もまた、なにかを挑発しようとしていた。

「どう？」

「端的に言うと、ヤンママっぽい」

「ひ、ひどおい。ねえねえねえ、」

「なんだ？」

「ヨクジョーした？」

「……」私はしばし押し黙った。歯の間から、押し出すように口にした。「も、もちろんさ」

考えていたのは別のことだった。そこそこ、

彼女たちと彼女たちを分けたのはいったいなんだったんだろう。浜松のジャスコにも無印が入っていて、ソニプラも、ヴィレッジヴァンガードも入っていて、私の眼の前でジャージを着てモデル立ちしている（自称）山の手のお嬢さまと、身につけているものはほとんど変わらない。にも関わらず、そこにはどうしようもなく絶望的な違いが存在する。

まさしく、資本主義の名のもとに速度と距離の逆説的な絶対性がそこそこを分けるのだ。

彼女は私をじろりとねめつけ、

「あんたなんか、あんたなんか、うなぎパイ食べ出て出直してきやがれ！」